

異形魚実態調査—II—(要旨)

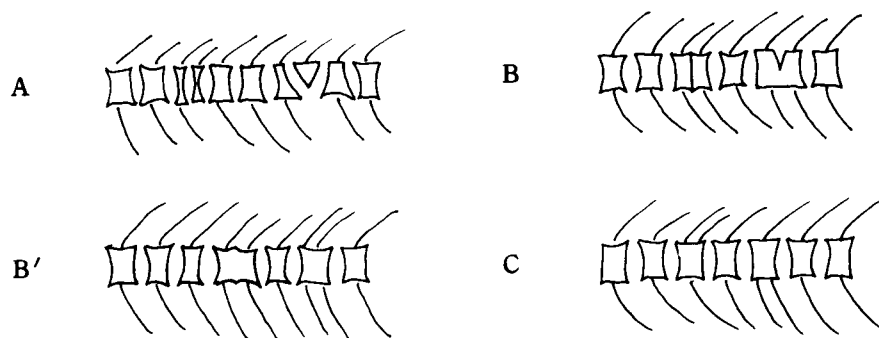
作 中 宏・小林良雄・佐藤 茂・小山忠幸

過去の放流効果調査の結果から、人工採苗アユを河川に放流した場合に、放流後の採捕率、成長等は湖産アユや海産アユのような、いわゆる天然産アユのそれと比較するとかなり劣るということが指摘されてきた。その原因の一つとして考えられたのが、人工採苗アユに高い率で出現する異形の問題である。一方、天然産アユについては、この異形の出現率は非常に低いといわれているが、これに対する詳細な報告例は少ない。このような観点から当场では昨年度、この天然産アユにおける異形魚の実態調査を実施したが、今年も引きつづき同様の調査を行った。

なお、本調査の結果は昭和52年度淡水水族委託調査報告書としてすでに報告してあるので、ここでは要旨のみを記載する。

天然におけるアユの異形魚出現状況の実態を調査するために、相模湾産稚アユ1,534尾(採捕場所、日時の異なる3群)、河川溯上アユ968尾、琵琶湖産アユ164尾について椎体異形の有無を調査した。なお、出現する異形のタイプは昨年は5つに分けたが今年は椎体の異形という観点から次の4つに分類した。

タイプ		昨年の分類
A: 椎体変形	椎体の短縮、歪み等の変形が見られるもの	A
B: 椎体癒着	椎体の一部もしくは全部が癒着するもの	B
B': "	神経棘、血管棘が一つの椎体から2本ずつ出ているもの	C
C: 棘過多	神経棘、血管棘いずれかが多いもの	C



異形のタイプの模式図

- 1) 河川溯上群の椎体数の平均は62.20個で、海産群の平均62.51個、湖産群の平均62.65個と比べて低い値を示した。
- 2) 異形魚の出現率は、海産群では11.44~15.07%、河川溯上群では10.64%、湖産群では34.13%で、湖産群を除くと昨年より低率となった。
- 3) 出現した異形のタイプで最も多かったのは、海産群及び河川溯上群では昨年同様Cタイプで、異形の内の51.2~62.1%を占めているが、湖産群ではAタイプが51.6%を占めていた。
- 4) 異形の発生は、海産群、河川溯上群については昨年と同様に尾椎骨後半に集中しているが、湖産群については全体に分散する傾向がみられた。